

# 佐伯市戦後五十年史(九)

## ―出納市政と教育―

矢野 彌生

(会員 佐伯市中山区)

〈前号〉

八 昭和二十年代の社会・文化

- (一) 社会福祉
- (二) 労働問題
- (三) 下城遺跡の発見
- (四) 十三重塔の再建
- (五) 主要文化団体の活動

九 出納市政と教育

- (一) 出納市政の発足と経過

第一期目 昭和三十年四月の市長選で当選) 昭和三十

十年(一九五五)三月三十一日、佐伯市は下堅田・青山・木立の三村を編入合併した。三村合併後、四月に実施された市長選挙では、三選をねらった矢野市長

と、人望のあった出納菊二郎の間で争われた。結果、出納菊二郎一万四八五四票、矢野龍雄一万七七七票と、約四〇〇〇票の大差で出納菊二郎が当選した。以後、三期十二年間、連続無競争で当選している。

出納菊二郎は、明治二十八年(一八九五)七月三十日に佐伯市中村の出納甫吉の長男として生まれる。菊二郎は大正三年(一九一四)三月、大分師範学校本科第二部を卒業すると、小学校教師としての道を歩み始める。

菊二郎は佐伯市・南海部郡の小学校訓導、校長として多年教育界にあり、野球をはじめ各種のスポーツを奨励し、教え子の体位向上に努めたことは有名。

昭和二十一年(一九四六)に佐伯小学校を退職すると、市学務課長・教育委員長と教育畑一筋に生きた人で、その人格の清潔さと明るい道義の上に立つ教育行政の育成など、ヒューマニズムの市政は高く評価された<sup>(29)</sup>。

〈健全財政確立を目標に〉 第一期はまず興人誘致による市税収入の大きな予想違いなどで、就任当時の赤字財政を克服、健全財政を確立することから始めている。

健全財政の確立を念頭に、許される限り消費的経費は緊縮、その反面、学校施設など投資的経費、すなわち、

事業面にあらゆる努力をしている。

財政確立の工業都市建設も、臼杵鉄工佐伯造船所の誘致、日本セメント・興国人絹の増設など一期目は赤字解消を願ったが、昭和三十二年から国家経済の不況が地方財政にも影響して目的の達成はできなかった。

### 第二期目

〈教育施設の整備を中心に〉 第二期目は佐伯小学校を初めとして、危険校舎の改築と児童生徒数の増加によって不常授業の解消から着手したが、この二期目の中心はやはり教育施設の整備にあった。

昭和三十四年には国民健康制度がスタート、市は市制二十周年を迎え、一般から市歌を募集、有馬尚の作詞・安部孝次の作曲したものが入選した。

### 第三期目

〈赤字解消ならず〉 昭和三十八年、第三期目もまた対抗馬もなく無投票当選。全国屈指の老朽庁舎の改築と、四十一年(一九六六)の大分国体の高校野球(硬式)とレスリングの試合会場が佐伯市に決定したため、球場の建設という二つの大事業を中心に三期目が始まった。

新庁舎は県の総合庁舎と隣合せ、元豊南高校跡に建設

することになった。財政的に、もつと当面の問題に取り組むべきだと議会内の空気もあつたが、昭和三十九年九月に現在の市庁舎が竣工した。

また、球場は、土地整備に自衛隊の応援を得て、これも続いて完成した。四十一年十月の大分国体には、球場に天皇・皇后両陛下、レスリング会場には秩父宮殿下のご臨席もあつて、大成功のうちに幕を閉じた。

市始まつて以来の大事業で赤字解消はできなかった。<sup>(60)</sup>

## (二) 学校施設の整備

校舎建築 〈教育投資が続いた十二年間〉 出納市政はほぼ完工 一期・二期を通して重点政策だった学校施設の整備、とくに校舎の新増改築をほぼ終了している。当時の佐伯市教育委員長の御手洗良策は、昭和三十八年の年頭のあいさつで次のように述べている。

(前略) わが佐伯市におきましては、つとに人造り・町造りを市政の基調として、市長を中心に関係当局の教育優先の施策を講ぜられて参りましたために、新学制への切替え当初、やや立遅れの感のした教育施設整備の事業も、五ヶ年計画最終の三十七年



度をもって、不正常及び老朽危険校舎の新増築を終了し、而も近代的構想による鉄筋鉄骨の建築をはじめ、プールの建設、給食施設の整備等、他都市を凌駕するに至りましたことは、御同慶に堪えないところであります。

尚、教育実践の成果については、県指定研究校四校、市指定二校、合計六校においては指定教科の研究実践に、格段の進展成果を挙げております。更に、社会教育の面でも、PTA研修及び婦人学級活動、図書館の逐次充実等、活発にして堅実な動きを見せている現状であります。

かかる進展に伴う教育経費も逐年増加し、昨年（昭和三十七年）末現在では、一億五千万円の多額に達し、市総予算の二十割を占めております。

然し乍ら、この過半数の六十四割は建築その他工事関係に充当され、運営上の消費的支出僅少のため需要費の一部は未だにPTAの負担に依存している実状で、これが軽減の対策並びに中学校技術家庭の施設、理科・音楽等の特別教室及び学校保健上環境整備等、多額の経費を要する事業が山積いたしてお

り、これらの解決対策としての年次計画の樹立が三十八年度における委員会の、重要且つ緊急課題となっておるわけであります（『市報さいき』昭和三十八年一月一日号）。

いま、出納市政の三期十二年間における学校施設関係を中心に、佐伯市学校（県立高校含む）のあゆみを紹介すると、第20表のとおりである。すなわち、第20表でも明らかのように、出納市政は小・中学校を中心に校舎建築が絶え間なく続行した十二年間であった。それは教育が将来の佐伯市の成長、発展に大きく寄与するという信念からでた「教育投資」であったといえよう。

### (三) 市営球場の建設と大分国体

市 営 〈三期目の大事業の一つ、球場建設〉 大分国体球場 体の高校硬式野球会場になる市営、佐伯球場の建設は出納市政の大きな事業の一つで、昭和三十八年（一九六三）十月に着工以来二年半の歳月と九千万円の巨費を投じて建設された。昭和四十一年（一九六六）五月竣工、同月十七日に球場開きをした。

当日の球場開きについて、『市報さいき』は次のよう

に依っている。

午前九時から市長はじめ市議会議長、国体事務局長(助役)、国体実行委員、工事施行者など関係者約20名が出席、神事のあと市長から工事施行の谷川建設、渡辺電気両者に感謝状が贈られ、芦刈議長が祝事を述べました。

続いて10時から球場開きの記念試合鶴城高対豊南高戦が行われました。鶴谷中プラスバンドの演奏で選手入場、市長の「国体には必ず出場して、この球場で頑張ってもらいたい」という激励の挨拶があり、続いて市長(投



佐伯市営球場(昭和43年版『市勢要覧』による)

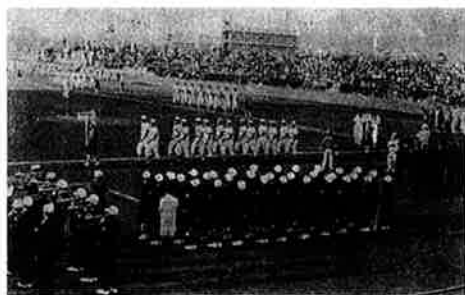
手)、谷川社長(捕手)のバッテリによる始球式で、記念の初試合が開始されました。

この日の球場には、この試合を見ようと、市民のファン約五百人が集まり、両校チームに声援をおくりなが

ら、球場の立派さに感歎の声を放っていました。

また、「両校ナインも「こんなすばらしい球場での試合には一段とファイトが湧く」と口々にほめたたえていました。

試合は豊南高の松田選手が新球場初のホームランをかつ飛ばすなど球場開きのゲームを盛り上げ、結局3対2で豊南高が初勝利を飾りました。なお、処女ホームマの松田選手には、市長から記念のトロ



24日 鶴谷中プラスバンドの吹奏ではなやかに入場行進(佐伯球場~開会式『市報さいき』による)

フイーが贈られました。

〔長島川の埋立工事は自衛隊の協力で進行〕 佐伯球場は総面積一万八千五百五十三平方メートル、グラウンド面積一万四千二百平方メートル、左右両翼は各九十メートル五十センチメートル、スタンドはコンクリート造りでネット裏十四段、内野九段、外野は芝生で収容人員一万人。

この球場は、県営大分球場に比べセンターも長く、収容力などすべて一まわり大きく、野球ファンが多い市民が県下一と自慢の出来るデラックスな球場である。

また、ネット裏の本館は鉄筋コンクリート三階建となっており、一階は事務、用務、応接の各室にロッカー二ヶ所、シャワー二ヶ所、便所二ヶ所のほか衛生室、切符売場など。三階は大会本部席となっており、いずれも心地よい設備が施されている(中略)。

なお、この球場の建設にあたり、主体工事は谷川建設工業KKの施行によるものですが、敷地造成には長島川の埋立工事が自衛隊の協力で進められたほ

か、国民年金から四千二百万円にのぼる多額の必要資金が融資されるなど建設に寄せられた各方面の協力には大へん感謝されている(『市報さいき』昭和四十一年六月一日号)。

大分 (第21回大分国体―高校硬式野球とレスリング国体) が佐伯市で開催) 第21回大分国体が昭和四十一年(一九六六)十月二十三日から六日間開催された。

当時の状況について『市報さいき』(昭和四十一年十月五日号)は次のように述べている。

(前略) 佐伯市では十月二十四日から二十七日までの四日間、佐伯球場、鶴城体育館の両会場で、高校硬式野球とレスリングが開催されましたが、天皇・皇后両陛下並びに秩父宮妃殿下のご臨席があり、市民あげて大会参加の感激をあらたにし、終始見ごとな出来ばえで大成功を収めました。

すばらしい競技場、花いっぱいきれいなまちづくり、市民のあたたかい歓迎、競技運営の妙、地元選手活躍等々、当市が競技会場として決定以来、『国体成功』を目標に長い間結集された市民の総力が、この大事業を成功させたのです。(中略)

佐伯会場の戦績

◆高校(硬式)野球↪津久見高校

1回戦↪不戦勝

25日 2回戦↪2対0秋田高校

26日 準決勝↪5対2桐生高校

27日 決勝戦↪0対1松山高高で準優勝

なお、軟式を含め、大分県は高校野球種目は総合

優勝。

◆レスリング

一般↪フリーバンタム級 池田博志 優勝。

一般↪グレコフライ級 早川国弘 一回戦で惜敗。

一般総合四位。

高校↪52k級 森田新一 5回戦まで進出(準優勝)。

同55k級 西村金治 4回戦まで進出。

同58k級 山下不二夫 同前。

同61k級 田村芳孝 個人8位。

同65k級 川島松広 同前。

同69k級 永野要佑 個人3位。

同73k級 久寿米木松平 個人6位。

同73k級以上 久保田直 個人4位。

以上、高校総合8位入賞し、レスリング総合は6位でした。

また、佐伯会場ではかつて経験したことのない盛況をみせており、連日競技の観客数は野球七四〇〇

人↪八四〇

〇人、レス

リングは六

〇〇人↪八

〇〇人と、

多くの市民

が応援して

いる。

〈大分国体と県下の状況〉 当

時、大分県は農

工併進をかけた

て県勢の発展を

はかっていた。

国体の開催を契

機に、さらに豊



レスリングバンタム級に優勝した池田選手 (佐伯信用金庫勤務『昭和46年版市勢要覧』による)

かな郷土への発展をめざすべく、国体の主題を「剛健・友愛・信義」をスローガンに、県民総参加の国体にしよ  
うとした。

昭和三十九年七月、第二十一回国体の大分県開催が正  
式に決定される。スポーツ水準の引き上げと県民の土氣  
高揚のため、天皇杯一位、皇后杯四位を目標に、種目ご  
とに選手強化の対策を急いだ。

昭和四十一年(一九六六)九月十八日、夏季大分国体が  
皇太子・同妃両殿下をお迎えして、別府市と日田市で開  
かれた。全国から三千七百十三人の役員・選手が参加  
し、水泳・水球・ヨット・ボートに熱戦がくりひろげら  
れた。

郷土から百十八人の選手が全種目に出場した。水泳で  
は五種目に優勝して、天皇杯一位に輝く。そのほかヨッ  
ト二位、ボート五位の好成績で、秋季大会への期待を強  
めた。

秋季大会の開会式は、天皇・皇后両陛下のご臨場のも  
と、十月二十三日、大分市宮陸上競技場で催された。

挙県一致、県民総参加の国体、一万四千と炬火が入場  
し、大会の雰囲気盛り上げた。

大会旗は、十月九日から県下五十三市町村を十五日間  
にわたって走りつづけ、炬火は十月二十日、国東半島の  
両子山頂で古式によって採火されて、若者達の手で会場  
まではこばれた。

競技は、二十八日までの六日間、五十四会場で二十八  
種が実施され、全国から一万七千人以上が参加、郷土勢  
も千三百人が出場している。

天皇杯一位、皇后杯は五位の成績をあげるほどのすば  
らしい活躍ぶりであった。

施設や道路など改善された半面、予算や教員増など  
で、その後遺症が見られた。

一方で新産都建設の歩みがあり、他方でこの国体を通  
じて県民の得たものは、やればできるという自信と勇氣  
とであった。

#### (四) 市庁舎の新築

市民待望の庁舎 (現庁舎は大正五年に建設) 佐伯町

の起工式 制は明治二十二年(一八八九)に市町制  
が施行され、佐伯町が生まれた。庁舎は旧城内(現・大  
手区)に置かれ、人口は一万未満であった。この庁舎



(写真参照)は、大正五年(一九一六)に大手前に新築されたもので、昭和三十九年(一九六四)に新市庁舎が完成されるまで使用された。

『市報さいき』(昭和三十八年四月十五日号)は、次のように、新市庁舎の起工式の状況を報道している。

待望久しかった佐伯市の新市庁舎の建設が、いよいよ具体化の段階に入りました。

同庁舎は去る四月五日午前十時、市長室において指名業者十社の間で、公入札を行った結果、村上建設が施行することに決定しました。

これは、鉄筋三階建(一部四階)の本館(二二六五坪)と、附属建物(四四七坪)の主体工事で、工費は一億二千四百五十万円、昭和三十九年六月三十日が完工期限となっております。

この外、電気・給水衛生・冷暖房・機械などの設備工事は五月中に入札を施行する予定となっております。

尚、去る四月十二日午前十時から建設予定現地で、起工式並びに鍬入式が行なわれました。式は、神事に引続き、市長の鍬入があり、式後十時半から

佐伯小学校講堂で祝賀会が開かれた。

当日は、衆議院議員 村上勇氏、

石田・福島両県会議員、池田前

市会議長、警察署長、

商工会議所会頭、市内

区長、日本セメント、

興国人絹、二平合板会

社の各代表をはじめと



起工式(神事)



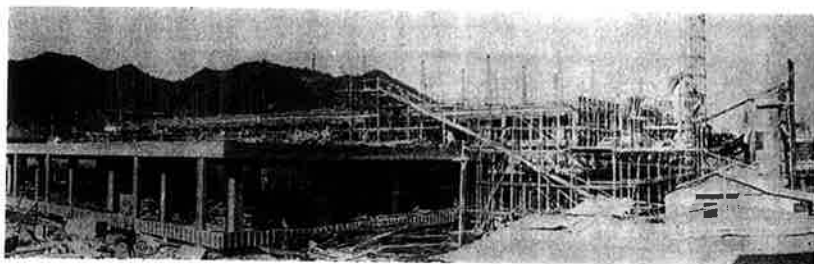
(鍬入式)

(『市報さいき』昭和38年4月15日号による)

して約百五十名の参加者があり、盛會でした。

新庁舎 〈市庁舎建設、落成 順調に進む〉  
旧豊南高校の跡地に建設中の庁舎は順調に進み、『市報さいき』（昭和三十八年八月十五日号）は、次のように報告している。

市庁舎の建設現場は、このところ天候にも恵まれ、活況を呈しています。目下のところ、一階の部分の鉄筋組立が終り、同時に本月初旬コンクリートタワー



建設中の市庁舎（『市報さいき』昭和39年1月1日号による）

も青空にそそり立っています。

間もなく型、わくの組立てと共に、本格的なコンクリート打込み作業が行われる予定で、工事は予定通り、順調な進捗を示しています。

建設現場は今足の踏み場もないほど資材が山積していますが、鉄筋の組まれている部分によって新庁舎の概形を十分に想像することが出来ます。来月中には一階の部分のコンクリート打込みが完了するでしょう。

〈新庁舎落成・総工費約二億円の巨費〉 佐伯市中村外にいに落成し、昭和三十九年九月二十四日に落成式が行われている。新庁舎は鉄筋コンク



市庁舎落成（『市勢要覧』昭和52年による）

第21表 昭和39年度予算

昭和39年度会計別予算調 (単位千円)

金 計 別	歳 入	歳 出
一 般 会 計	749,500	749,500
国民健康保険費	81,191	81,191
簡易水道事業費	1,160	1,160
と畜場事業費	989	989
他田土地区画整理事業費	5,152	5,152
大入島地区管理費	252	252
計	838,244	838,244

(※歳入額は決算額を指す)

昭和39年度 一般会計歳入歳出予算事項別調

款 別	予 算 額	款 別	予 算 額
1 市 税	230,060	1 議 会 費	15,107
2 地 方 交 付 税	1,500	2 議 会 生 活 費	197,574
3 地 方 交 付 税 負 担 金	140,000	3 議 会 運 轉 費	71,080
4 分 担 金 及 び 手 数 料	9,131	4 議 会 生 産 費	53,885
5 使 用 料 及 び 手 数 料	18,262	5 議 会 運 轉 費	65,252
6 国 庫 支 出 交 付 金	178,886	6 議 会 運 轉 費	28,728
7 国 庫 支 出 交 付 金	6,143	7 議 会 運 轉 費	10,590
8 財 政 理 財 費	6,848	8 議 会 運 轉 費	52,734
9 財 政 理 財 費	17,000	9 議 会 運 轉 費	31,641
10 税 務 費	480	10 議 会 運 轉 費	114,422
11 税 務 費	1	11 議 会 運 轉 費	67,294
12 市 債 収 入	9,489	12 議 会 運 轉 費	40,581
13 市 債 収 入	131,700	13 議 会 運 轉 費	500
14 市 債 収 入		14 議 会 運 轉 費	500
歳 入 合 計	749,500	歳 出 合 計	749,500

(『市報さいぎ』昭和39年4月1日号による)

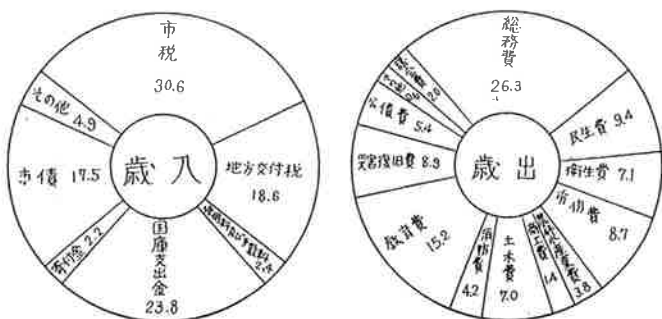
リート四階建て、延べ五千七百平方メートルで、総工費二億円の巨費で建設(佐伯市の昭和三十九年度の一般会計は七億四千九百五十万円)されたもので、モダンな建物は市民に、落成式を前に十九、二十の二日間公開している。

(五) 市の財政

積極的な「事業予算が一般会計の四九〇を占めた昭和事業予算 三十九年度」昭和三十八年五月出納第二郎

は市長三選を果たし、三期目に入った。いま、昭和三十九年度の佐伯市の一般会計予算を中心に、その概要を紹介したい。

昭和三十九年の予算規模をみると、第21表・第14図のとおりである。一般会計予算総額は七億四千九百五十万円で、普通建設事業費一億三千六百二十万円、災害復旧費六千七百二十九万四千円、失業対策事業費六千五百二十五万二千円で、この計三億六千八百五十



第14図 昭和39年度予算の事項別構成比 (『市報さいぎ』昭和39年4月1日号による)

六万九千円(四九折強)にのぼる事業費が計上されており、事業予算の性格がよく表われている。

普通建設事業費の主なものは、市庁舎建設費の八千九百三十万円をはじめ、市営球場建設事業費三千五百五十万円、し尿処理場建設事業費三千四百三十万円、その他消防庁舎建設・都市計画事業・西上浦小学校改築・彦陽中学屋内体育館建設等々が含まれており、議会開会当初述べられた出納市長の施政方針に示された積極的事業推進の意欲が反映されている。<sup>(63)</sup>

### 【注】

(59) 矢野彌生「佐伯人物伝・出納菊二郎」(『市報さいき』平成十二年四月一日号)

(60) (59)に同じ

(61) 『第21回国民体育大会報告書』(佐伯市 昭和四十二年)

(62) 『大分の歴史』(9)戦争から繁栄へ(大分合同新聞社 昭和五十四年)

(63) 『佐伯市報』(昭和三十九年四月一日号)

## 津久見峠

津久見市と臼杵市を結ぶ道が鎮南山(五三六・四<sup>メートル</sup>)東方二<sup>キロ</sup>の山地を越える所にあつた峠。国鉄日豊本線津久見駅の北西四<sup>キロ</sup>。津久見市青江地区平岩と臼杵市宇内畑との境をなす。標高四一〇<sup>メートル</sup>。昭和五十三年三月西一<sup>キロ</sup>に国道二一七号の臼津バイパスができた。

東方一・五<sup>キロ</sup>に日豊本線徳浦トンネルがある。「大友興廃記」に、天正二年大友宗麟が狩をし、佐伯の床木六郎五郎なる狩人を使い、鹿笛を吹いて狩をしたとある。

また、慶長五年太田一正が旧領臼杵の城に籠城して幾度かの戦に勝っているが、既に西軍が関ヶ原の戦に負けている事を考え城を中津の黒田如水の甥に渡し、一族が夜舟を海に浮べ伊予に去って行ったことを津久見勢は残念がり、津久見の坂を越えて、中川秀成を野津院まで走らせた(大友史料)。津久見峠は古戦場でもあつた。

この峠道は昭和四十五年五万分の一地形図にはある(道路沿いに二つの水準点もある)が、同四十九年の二・五万分の一の地形図にはなくなっている。  
〔角川日本地名大辞典〕